ヴァージニアコロニアリズムのレトリック

高　橋　正　平

序

1606年４月10日発布のジェームズ一世の勅許状によりロンドン・ヴァージニア会社は本格的に活動し始め1624年に解散するが，その間に一般入植者及び投機者の関心をヴァージニアに向けさせ，併せて植民の合法化を宣伝するために当時の名だたる説教家にヴァージニア植民擁護の説教を行ってもらった。この説教には共通したレトリックがあった。それは聖書の一節をヴァージニア植民に「適応」することであった。ロンドン・ヴァージニア会社からの依頼により植民擁護を行った説教家は８人であるが，本論ではヴァージニア植民擁護の最初の説教を行った1609年の William Symonds，翌年1610年の Symonds の説教に感化を受けた William Crashaw の説教，最後にヴァージニア植民擁護説[1]教の最後の説教である1622年の John Donne の説教を取り上げ，各説教家の植民擁護のレトリックについて考察を加えていきたい。

１．William Symonds

ロンドン・ヴァージニア会社によるヴァージニア植民はジェームズ一世公認の国家プロジェクトとも言うべくイギリス国民の期待を一心に集めていた大事業であった。しかし当初の期待は裏切られ，大した成果はあげられず，投機者からの不満はつのりつつあった。更に悪いことにジェームズ一世は大国スペインの機嫌を損ねることを恐れ，ヴァージニア事業を放棄するとのうわさが流れ

た。それに対してヴァージニア会社は宣言書や現地からの報告書を公表することにより，人々の植民への関心を留めようと躍起になっていた。しかし，それだけでは一般人の植民への不安は消えなかった。ヴァージニア会社は，植民が利益追求の世俗的な事業であるよりは宗教的な事業であり，単なる金儲けのための植民ではないと投機者及び入植希望者を安心させ，何よりもヴァージニア植民は安全な植民で何ら問題はないと聴衆及び植民に関心を寄せている人々を説得する必要があった。そこでヴァージニア会社が目を付けたのが当時の著名な説教家であった。会社は，会社の生き残りを説教家の雄弁に託したのである。かかる理由から会社は著名な説教家にヴァージニア植民促進のための説教を行ってもらうことにした。ヴァージニア植民擁護の説教の共通テーマは新大陸における英国プロテスタンティズムの普及，植民地化の合法性，この世の楽園としての豊饒なヴァージニア，反スペインで，とりわけヴァージニア植民のキリスト教的使命がまず第一に強調される。その最初の大役を担ったのはSymondsで，彼は最初の公式のヴァージニア植民擁護の説教を1609年4月25日White-chapelで多くの名士，冒険者，植民者を前にして行った。それは現に入植しまた入植予定の植民のためとキリスト教の目的促進のために行われた説教である。SymondsはSouthwarkにあるSaint Saviour教会の説教家であり，Oxford大学Magdalen Collegeの元フェローでもあった。彼はカトリック教徒への学識ある反駁で名声を高めたが，その説教は，イギリス人は新世界という約束の地に定住すべく神から任命されたという以後のヴァージニア説教のモデルとなった説教である(2)。Symondsはいかなるレトリックを駆使し，ヴァージニア植民擁護の説教を行っているかを次に見てみよう。

【1】ヴァージニア植民者の原型としてのAbraham

SymondsはOxford大学の元フェローであっただけに聖書への造詣は深く，聖書を自在に操り，その説教は雄弁で説得力豊かである。Symondsは説教で何を行ったかと言えば，それは聖書のヴァージニア植民への適応なのである。ヴァージニア植民の先例がすでに聖書にあるというのである。Symondsはこの

レトリックにより聴衆の植民に対する不安を解消しようとする。Symonds は White-chapel に列席した聴衆への献呈書簡のなかで，旧約聖書の様々な出来事ーノアの大洪水，ソドムの焼却，ファラオの溺死，ダヴィデとその子孫によるカナン人征服等ーに言及し，それらは新世界アメリカで進行中の植民と比べると「片隅」で行われたと述べ，ヴァージニア植民の規模がいかに大きいかを強調する。そして Symonds は，主は異邦人を前にして「聖なる腕をあらわにし」「地のすべての果ては神の救済を見る」(イザヤ書) を引き合いに出し，ヴァージニア植民には神の加護があり，地の果てヴァージニアにまで神は救済を行うと言う。更に Symondsは，ヴァージニアは処女王エリザベスにちなんでつけられた名前で，ジェームズ一世は処女地ヴァージニアをキリストに捧げることを望んでいると言う。そうすることにより主の名前は褒め称えられ，イギリス人は大ブリテンに対して処女ブリテンを付け加えることになる，と言う。ヴァージニアをキリストへの捧げものとすることによって植民の宗教性を高め，更にはヴァージニアを本国イギリスへの花嫁として見なすが，この論法でいけばイギリスはキリストとなる。Symonds は大胆に聖書とヴァージニア植民を結びつけ，植民の宗教性，神聖さを訴えるのである。

Symonds のヴァージニア植民のレトリックが最も顕著に現れるのは本論に入ってからである。Symonds は，「創世記」12章1-3節を取り上げ，聖書からヴァージニア植民を援護する。「創世記」12章1-3節は，Abraham が主の召命を受け，故郷ハランから未知の土地パレスチナ・カナンへの旅を記した箇所である。

For the Lord had said unto Abram, Get thee out of thy Countrey, and from thy kindred, and from thy fathers house, unto the land that I will shew thee. And I will make of thee a great nation, and will blesse thee, and make thy name great, and thou shalt be a blessing. I will blesse them also that blesse thee, and curse them that curse thee, and in thee shall all the families of the earth be blessed.（主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にしあなたを祝福し，あなたの名をたかめる。祝

福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し，あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。)[3]

Symondsはこの1-3節の解釈から説教を始める。ここでは何が記されているかと言えば，主による故郷を離れるようにという主によるAbraham召命である。Abrahamは何から離れるのか。祖国，親族及び父の家からである。しかもAbrahamは「彼には全くの未知の土地」[4]を主から示されるだけである。しかしなぜAbrahamは故郷を捨て，未知の土地へと旅立たねばならないのか。それはAbrahamへの神の4つの約束があるからである。それは(1) Abrahamを大いなる国民とする(2) Abrahamへの祝福(3) Abrahamの名を大きくする(4)Abrahamを通して彼の家族，彼が住む人々への祝福が主から与えられる。これら4つの約束が主からAbrahamになされる。これらの約束の実現のためにAbrahamは故国を捨て，カナンへと旅立つ。Abrahamのカナンへの旅には主の意志を実現しようとするAbrahamの従順な信仰心の現れである。Abraham以外の人達への主の約束はどうなるのか。主はAbraham同様他の人々をも祝福し，Abrahamの祝福と繁栄を求める人達を繁栄させるが，逆にAbrahamに対して他の感情を抱けば彼らには主からの呪いがある。

Symondsが「創世記」を説教に取り上げた意図は容易に理解できよう。我々はSymondsの説教から聖書のヴァージニア植民への適応がいかなるものであるかを明確に知ることができる。「創世記」は以下のようにヴァージニア植民へ適応される。Abrahamが神に召されて故郷を離れ，ユーフラテス河を越え，未知の土地カナンに向かったと同様，ヴァージニア植民者も故郷イギリスを離れ，大西洋を渡り，未知の土地ヴァージニアへ向かう。主がAbrahamに「大いなる国民」「祝福」「大いなる名前」を約束したように，ヴァージニア植民者も「大いなる国民」「祝福」「大いなる名前」を神から約束される。Abrahamはカナンへ行くよう主から召命されたようにヴァージニア入植者もキリストを聞いたことのない異民族に福音を広めるように神から召命される。Symondsは次のように言う。

Neither can there be any doubt, but that the Lord that called Abraham into another countrey, doeth also by the same hand, call you [the planters] to goe and carry the Gospell to a Nation that never heard of Christ.(5)

Abraham をカナンへ召命した主はヴァージニア植民者をもまた召命する。植民の目的は福音を広めるためでしかもそれは神の召命によるから，人々はどうしてもヴァージニアへ行かねばならない。ヴァージニアへの植民を拒否する者は神への反逆者となる。Symonds はこの説教で述べていないが，Abraham はイスラエル人の祖となったようにヴァージニア植民者もまた新大陸アメリカの祖となるべく運命にあるのである。「創世記」の記述が巧みにヴァージニア植民へ適応され，Abraham の行動がヴァージニア植民者の行動へと重ね合わされる。言うなればヴァージニア植民者は Abraham が「創世記」で行ったことを行っているにすぎない。しかし厳密に考えれば Abraham のこの適応には無理がないわけではない。最も大きな問題点は，Abraham はヴァージニア植民者では誰に適応されるのかということである。ヴァージニア植民で Abraham に匹敵する人物は誰であろうか。1609年までの植民の指導者的人物と言えば John Smith の名が浮かんでくる。彼は1607年にジェームズタウンに上陸し，1608-09年の間植民地の知事を勤め，ヴァージニア史概説や植民の宣伝文書も書き，インディアンの王女ポカホンタスによって九死に一生を得たヴァージニア植民の歴史では半ば伝説的な人物である(6)。Symonds は Abraham に匹敵する人物に誰を考えていたのか定かではない。更に「創世記」では彼はハランを離れたとき75歳で，妻サライと弟の子ロトと，集めた財産とハランで得た人々とを携えて，カナンへ向かったと記されている。これらの記述はヴァージニア植民ではどのように適応されるのか。もう一つの大きな問題点は Abraham のカナンへの移住の原因である。なぜ Abraham がカナンに移住したかは聖書では明確に説明されていない。一節には故郷ハランにおける月神信仰堕落のためとかハムラビ王朝期の太陽神信仰への反発から Abraham はハランを離れたというが真相ははっきりしない。いずれにせよ何らかの宗教的な理由でAbraham はカナンへ旅立つことになった。ところがヴァージニア植民にあっては1609年頃本国イギリ

スにおける宗教的対立からヴァージニア植民が行われたのではない。これは1620年のPilgrim Fathersを乗せたメイフラワー号によるアメリカ移住については正しいが，1609年までのヴァージニア植民にはあてはまらない。もちろん宗教的対立からヴァージニア植民を目指した者もいたであろうが，それはわずかであった。ほとんどは利益目的のための入植であった。以上の点は厳密に言えばヴァージニア植民には当てはまらないが，Symondsは「創世記」の記述のすべてがそのままそっくりヴァージニア植民に適応できるとは考えていないのであって，ただSymondsが言いたかったのは信仰心厚いAbrahamが主の召命に従順に従い，未開の地カナンに向かって故郷を離れ，その後のイスラエル人の反映の礎となったという事実に着目し，それを半ば強引にヴァージニア植民に適応したというのが真相であろう。要は暗礁に乗りかかったヴァージニア植民をいかに立て直すかが焦眉の急で，Symondsはイギリス国民の植民への気運を一気に盛り立てようとしたのである。だから細かい点は抜きにしてAbrahamの主による召命によるカナンへの旅はイギリス人のヴァージニアへの旅のひな形のようなものになればそれで十分だったのである。ヴァージニア植民は実際はヴァージニアからの利益を期待した主として経済的な事業であったが，Symondsはその植民事業を主からの召命によるカナン移住と重ね合わせ，ヴァージニア植民がAbrahamの行動と同様のことを行っているのだと言うのである。Symondsは更にカナンをヴァージニアに適応する。主の命令に従いAbrahamはカナンに旅立つが，イギリス人が向かうヴァージニアは「カナンの地」にも匹敵する豊饒の地である。

The land [Virginia], by the constant report of all that have seene it, is a good land, with the fruitfulnesse whereof, and pleasure of the Climate, the plentie of Fish and Fowle, England, our mistresse, cannot compare, no not when she is in her greatest pride. It is said of Canaan, that *Isaack sowed in that land, and found in the same yeere, an hundredfold, by estimation.* [Genesis: 26:12] and the next addeth, *And so the Lord blessed him.*(7)

Symonds 以後の説教でお決まりのトピックになった豊穣のトポスとしてのヴァージニアがここには描かれている。ヴァージニアはイサクが地に種をまき，百倍の収穫を得たカナンよりもはるかに豊穣な地である。Symonds は言葉を続けて更に次のようにヴァージニアの豊穣を賞賛する。

But here[in Virginia]is greater then so[Genesis:26:12]: For, if I count aright, this land [Virginia]giveth five hundred fold at one harvest. For the *eares of Wheate*, which I have seene, are ten in square, and fifitie long:(8)

ヴァージニアで不足するものは何もない。カナンが主の祝福を受けたようにヴァージニアも主の祝福を受けることになる。Symonds はヴァージニアをカナンに匹敵する豊穣の地であると激賞するが，ヴァージニアはエデンの園とも比較される。

Let us bee carefull to goe to the place[Virginia], that God will shew us to possesse in peace and plentie, a Land more like the garden of Eden: which Lord planted, then any part else of all the earth.(9)

Symonds はヴァージニアを神が建設した第二のエデンとするが，このたとえにも無理があることは明らかである。なぜならばエデンに住むアダムとイブは神に逆らい，楽園から追放されるからである。Symonds はこのような矛盾に無知であるはずはないが，堕落以前の楽園のイメージをヴァージニアに当てはめようとしている。

Symonds は，Abraham のカナンへの旅をイギリス人のヴァージニアへの植民に適応するが，Abraham の旅同様，植民事業が失敗することはありえない。Symonds は次のように言う。

Now what the Lord promised to Abraham, was also promised to al those that are of the same faith and obedience with him. Then this blessing, of being a blessing,

belongeth un[to]those which at Gods commandement doe *Get them out of their Country.*(10)

主の Abraham への約束は Abraham と同じ信仰と従順さ持ち合わせている人々にも約束される。ヴァージニア植民者も Abraham 同様神への信仰と従順な気持ちを持てば神からの約束がある。そしてたとえヴァージニアに敵が現れても，神は敵を呪うのである。だからいかなる点から見てもヴァージニア植民は必ずや成功し，また，イギリス人も故国を出ていかざるをえない。なぜならヴァージニアへ向かう者には神からの保証があるからである。

... *Abraham* must get him out of his Countrie: that he may begin that, which God, by him and his seed, will accomplish in due time: namely that all nations may embrace the gospel of Christ unto their salvation.(11)

この引用文では Abraham は明らかにヴァージニア植民者となっているが，植民者は神の代理として異邦の民に福音を教え，彼らを救済へと導くのである。

主の召命に応ずる Abraham には主への揺るぎない信仰心と従順さがあった。それに主からの召命は植民者の聖別をも意味する。それと同様ヴァージニア植民者にも神への不動の信仰と従順がある。何よりも心沸き立つ精神的支柱はヴァージニア植民へ従事する者は神からの特別な聖別を受ける者となり，彼らは神の選民としての神との特殊な関係を築くことになる栄誉を付与される。これは聴衆の心を震え立たせる「殺し文句」である。1609年までのヴァージニア植民の実績は当初の植民関係者の期待を大きく裏切る結果となっていたが，それは少しも悲しむべき事ではない。植民者は神への不動の信仰と従順によりそのような困難な状況を好転させ，植民繁栄を必ずやもたらすことになる。幾多の困難は繁栄へ至る試練にすぎず，神は決して聖別された植民者を見捨てることはしない。ヴァージニア植民の将来に不安が生じ，植民への熱意が失われつつあったなかで，Symonds の幾分誇張された扇情的な説教は聴衆をいたく喜ばせたに違いない。この説教では Abraham はヴァージニア植民者となり，植民者

にとって行動の規範となる。未知の国へ向かう植民者の背後には絶えず見守ってくれる神がいるというレトリックは以後の植民活動に計り知れない自信を人々に与えることになる。

【2】ヴァージニア植民は合法的か

ヴァージニア植民が抱えていた問題の一つに既に住民がいる土地の植民地化が果たして合法的なのかという問題があった。Symonds によれば人間はそもそもよその土地に住み，そして地を満たすよう神から命令されている。人が自分の土地以外に広がり，地に住み，地を満たすことは神の言葉の周知の規則である[12]。神に似せて人を作った神は地のすべてを治めさせた。だから地を満たさなければ人はすべてを治めることはできない。アダムについても神はアダムの堕落後地を耕させた。ノアはどうか。大洪水後神からノアは地を満たすように命じられている。Abraham にしても彼はカナンへ主から召命されたがまたさらに遠くへ広がることを不可避とした。ユダヤ人はしばらくの間寄留し，また帰国するためだけでなくすべての地に住み，満たすために自分以外の土地に広がっていったのである。神に召命されることは地を満たすことでもある。ヴァージニア植民者も神から召命され，ヴァージニアをキリスト教徒で満たす。それは神の御業を知らしめ，神の知識を広めるためである。すでに原住民が住むヴァージニアの植民化はいうなれば神からの召命の結果であり，かつまた，聖書以外の過去の歴史を見ても何ら問題はない[13]。Symonds は古代ローマやギリシアや他の歴史上の王たちですら諸国を征服したし聖書の偉人たちでも他国を征服した。彼らの行為が非難されることはありえない。Symonds は聖書以外の諸王の他国征服の事実及び聖書での偉人たちによる征服を例に挙げ，ヴァージニア植民反対者は主張を修正しなければならないと言う。

> Sure I am persuaded that at the onely naming of so mightie Monarchies, and holy conquerors, our objecters out of their modesitie will with some distinction qualifie their proposition, and say that it is not lawfull, by force to invade the

Territories of other Princes, that are in quiet possession, in some sort, and in some cases.[14]

この引用文の後半でSymondsは，植民反対者が武力による他国への侵略は非合法であると言うことを信じていると言うが，これはSymonds自身も武力による他国侵略は非合法的であるとの見解であることを意味している。植民には「血なまぐさい侵略」(a bloody invasion）による植民と「平和な植民地建設」(the planting of a peaceable Colony）があり，両者の間には異いがあると考えている[15]。Symondsの意図するところは容易に理解できる。つまりSymondsは，ヴァージニア植民は「血なまぐさい侵略」ではなく「平和な植民地建設」であると言いたいのである。「血なまぐさい侵略」によらない植民はまた攻撃的な戦争によらない植民をも意味する。神によって祝福された戦士としてCyrus, Joshua, Davidが挙げられる。そしてヴァージニアでインディアンと平和に暮らす入植者の原型としてペリシテ人の間でのSamson, エジプトのJacobとJosephが言及される。彼らは異国の地で皆現地の人々と衝突することがなかった人物である。昔から「非常によく賞賛された植民という行為がなぜヴァージニア植民を行うイギリス人にあっては“vile and odious”と非難されるのか」とSymondsは問いかける[16]。ヴァージニア植民は侵略ではなく，純粋に宗教的な使命を異国の地で成し遂げるための神の召命以外のなにものでもない。しかしよく考えれば血なまぐさい植民も平和的手段による植民もいずれも他国への侵略であることには変わりはない。武力によらなければいかなる侵略も許されるといういささか強引な論法であるが，一方が他方を支配するという点においては同じである。また実際のヴァージニア植民が果たして原住民との武力衝突もなく平和裡に進行していたとはとうてい言えない。John Smithを例にとっても明らかなようにイギリス人とインディアンとの間には絶えず武力衝突があった。Symondsの平和的な手段による植民地化は植民実行者のイギリス人を余りにも美化しすぎている。Symondsの平和的手段によるヴァージニア植民はあくまでも彼の理想であり希望にすぎず，Symondsはヴァージニア植民の現実を軽視していると言わざるをえない。

Symondsはヴァージニア植民合法化の問題解決を以上の2点から行っている。一つは神からの「地を満たせ」の命である。地を満たすことは神の大いなる力を知らしめることとなる。だから他国を侵略してもそれが神の御業の周知徹底させるということになれば侵略は許されることになる。しかしこの論法は裏返せば神の御業を盾にして他国の侵略を可能にせしめる論法でもある。一言で言えば「神の御業」を隠れ蓑にして植民者はいかなることも行うことができるのである。もう一つは平和的手段による侵略と武力による侵略の違いである。ヴァージニア植民は武力による侵略でないから許される侵略となる。これら2点からSymondsはヴァージニア植民の合法化を図るが，しかし，もう一つ重要な論点がある。それはキリスト教絶対主義の精神である。現代からすればキリスト教絶対論はとうてい受け入れられない論法である。一つの宗教だけを絶対と見なし他を認めないことは現代ではありえない。しかしSymondsはキリスト教を唯一絶対的な宗教とみなし，ヴァージニア原住民の宗教を認めない。これはまた白人至上主義論で，インディアンは白人よりははるかに劣った人種と見なす立場である。この白人至上主義は，完全無欠なキリスト教徒イギリス人が間違った宗教にとらわれているインディアンをキリスト教に改宗させることは神の意志であるという一方的な強引な主張と結びつれられる。善は悪を矯正するのである。インディアン改宗をスローガンにすれば先住民がいるヴァージニアの植民は許される。Symondsの植民合法論法は聖書の権威を借用した白人の身勝手なレトリックであるとも言えるが，Symondsからすればインディアンに救いをもたらす目的のために植民が合法化されるのである。

Symondsは「創世記」12章1-3節をヴァージニア植民に適応し，Abrahamが神から行うよう命令されたのと同じ事をヴァージニア植民者は行うのだと言う。Abrahamが神に従い，その子孫が神の定めた土地に定住したように，ヴァージニア植民者もいわば神からの召命によってヴァージニアへ行くのである。Abrahamが受けたと同じ神からの祝福をヴァージニア植民者は受けることになる。

1609年はヴァージニア会社にとって極めて危機的な年であった。ヴァージニ

ア植民が順調に行かず，ヴァージニアからも吉報が届かない中で，一般の人々のヴァージニア植民への興味・関心は薄らぎつつあった。ヴァージニア会社は人々の眼を再度ヴァージニア植民に向けるため説教家にヴァージニア植民を「宣伝」するような説教を依頼した。その最初がSymondsであったが，Symondsは会社の意向を十分に汲み，会社側を歓喜させる説教を行うことになった。それは聖書の一部のヴァージニア植民への適応の説教である。予型論的に言えば，予型としての「旧約」の対型がヴァージニア植民ということになる。聖書をヴァージニア植民に適応することにより，ヴァージニア植民の神聖性及び正当性を主張するのである。ヴァージニア植民の先例を聖書の中に見出すことにより，人々にヴァージニア植民に対する勇気と希望を与えたのである。ヴァージニア植民は神からのお墨付きをもらったことになる。Abraham→ヴァージニア植民者，カナン→ヴァージニア，という対応がここでなされ，「旧約」の予型がヴァージニア植民の予表となっている。

Symondsの説教はヴァージニア会社の依頼による最初の公式説教で，以後のヴァージニア植民擁護説教のモデルとなった。Symonds以降の説教家はSymondsの説教から説教のテーマを得ることになる。主として植民の目的・意義と植民の合法化が説教の主題となるがこの他にも対スペイン，反カトリック教等が論じられる。ヴァージニア植民にさいしヴァージニア会社が説教家に望んだことは何かと言えば暗礁に乗りかかった植民活動の再活性化であり，再び人々の目をヴァージニアへ向けることであった。さすがSymondsはヴァージニアには金銀が豊富に埋蔵しているとは言わなかったが，ヴァージニア植民は決して無駄な植民ではないことを何度も強引な詭弁とも言えるレトリックを駆使し聴衆の心をくすぐる。植民者は未知の土地に行き，キリストの福音を広め，新大陸アメリカの祖となるべく神から召命される。彼らの行く手には幾多の困難が待ち受けようとも必ずや神が味方してくれる。Symondsの熱っぽい説教が聴衆を感動・興奮の渦に引き寄せたことは説教2週間後に説教が印刷され出版された事実からも知れよう。いずれにせよSymondsの説教のレトリックは新訳・旧訳の聖書に基づいてヴァージニア植民を擁護するというもので，その意味でも聴衆の心をしっかりとつかんだ説教であったといえる。説教は全体

的には白人優越主義，キリスト教絶対主義の論法が著しく，先住民インディアン蔑視論が如実な説教である。この説教がいかに白人至上主義の固まりであるかに聴衆は気づかなかったはずはなかったが，当時はこの論法が堂々とまかり通った時代でもあった。いずれにせよ聖書によりヴァージニア植民を論じた説教として以後の説教家に与えた影響は大きい。この年1609年11月にはヴァージニア植民を更なる危機が待ち受けることになるが，そのようなことを Symonds も聴衆も知るよしもない。ただ Symonds の熱弁は聴衆の心を揺るがしたことだけは確かである。

2．William Crashaw

William. Crashaw はカトリック教詩人 Richard Crashaw の父で，カトリック教への激しい反感とピューリタン的感情を持った人で，ロンドン Inner Temple の説教家であった。その Crashaw が1610年 2 月21日ヴァージニア植民を擁護する説教を行った。前年1609年後半に至り，ヴァージニアからは悲観的なニュースがロンドンに伝わり，ヴァージニア会社を取り巻く状況は悪化の道をたどるばかりであった。Sir Thomas Gates をリーダーとした *Sea Venture* 号が Bermuda 島沖で難破したのである。彼らは Bermuda 島で生き延び，新たにヴァージニア植民へ向かうことになるのであるが，Crashaw の説教時には難破のニュースしか伝わっていなかった。前途が見えないヴァージニア植民をめぐる絶望的な状況のなか，Crashaw はヴァージニア植民の必要性を聴衆に訴える。Crashaw は以下の「ルカ伝」22 章32節を基にヴァージニア植民擁護の説教を行った。

But I have praied for thee, that thy faith faile not: therefore when thou art converted strengthen thy brethren「しかし，わたし（イエス）はあなた（ペテロ）のために，信仰が無くならないように祈った。だから，あなたは立ち直ったら，兄弟たちを力づけてやりなさい。」

Crashaw は説教でこの一節を取り上げ，ヴァージニア植民を雄弁に，強硬に擁護・推進した。彼の説教は1622年の John Donne の説教には匹敵する程の力強さ

があるが，前年1609年2月のSymondsの説教に敬意を払い，説教の内容もほぼSymondsの説教を踏襲している。ヴァージニア植民の目的，植民の合法性，豊饒な地としてのヴァージニア，反スペイン，反ローマ教会，これらはSymondsの説教のテーマであったが，Crashawも説教でこれらを論ずる。

【1】ヴァージニア植民の目的

Crashawはヴァージニア植民の目的をどのように見ているのか。Crashawは，Symonds同様ヴァージニア植民の目的はヴァージニアにおけるイギリスキリスト教会の創設と悪魔からキリストへのインディアンの改宗であると述べ，植民の宗教的性格を強調する。

... the principal ends of thereof [i.e. Virginia plantation] being the plantation of a Church of English Christians there [in Virginia], and consequently the conversion of the heathen from the divel to God:[17]

あるいは“the high and principall end being plantation, of an English Church and Common-wealth, and consequently the conversion of heathen”[18]，“the conversion of their [Savages'] soules[19]，“convert the heathen world”[20]，“the conversion of that remainder of the heathen”[21]，“You [Lord de la Ware] go to commend it [religion] to the heathen[22]，“Gospel which thou [Lord de la Ware] carriest with thee”[23] 等からも明らかなようにCrashawにとってヴァージニア植民の目的はヴァージニアの異教徒改宗である。ヴァージニア植民者は異教徒にキリスト教を教え，異教徒はキリスト教から救済を得る。ヴァージニア植民の目的は異教徒のキリスト教への改宗以外には考えられない。Crashawの説教の最も顕著な特徴は異教徒の改宗である。Crashawは更には次のようにも言う。

If the planting of an English Colonie, in a good and fruitfull soile, and of an English Church in a heathen countrey, if the conversion of the Heathen, if the propagating

of the Gospell, and inlarging of the Kingdome of Jesus Christ, be not inducements strong enough to bring them into this businesse, it is pitie they be in at all.[24]

肥沃な土地での英国植民地の建設，界教徒の改宗，福音の普及，イエス・キリスト王国の拡大のためにヴァージニア植民に加わらなければ植民活動は意味のないことである。植民の宗教性はヴァージニア植民説教の大きな特徴の一つであるが，Crashawにあっては植民のキリスト教的使命の強調は他の追随を許さない。ヴァージニア植民はキリスト教と密接に絡み合っており，Crashaw にとって異郷の地における神の国建設はヴァージニア植民の絶対的条件である。Crashaw は説教のなかでヴァージニア植民に支障をきたしている7つの“discouragement”を挙げ[25]，更に3つの“encouragement”を取り上げているが，その“encouragement”の一つ「植民の目的」こそが植民推進の強力なてことなるのである。植民目的はヴァージニア異教徒の改宗である。未開人をキリスト教徒に改宗させ，天国の栄光を彼らに与える。それはまた神と我々に関わり，植民を通して神の怒りをなだめ静めることにもなる。改宗した異邦人を神に捧げる以上に良いものはない。第二に植民は我々の罪によって汚された神の名を崇め，我々の罪が阻止した神の王国を促進する。第三に植民はカトリック教会が汚したキリスト教徒を崇める。第四に植民によってキリストの使徒たちが持ち合わせていた異教徒改宗の精神の火花がまだ我々にも残っていることを世界に証言する(K1-2)。以上がヴァージニア植民の「高尚かつ最も重要な目的」であるが，ヴァージニア植民に従事するイギリス人及びイギリス人の名誉をも高めてくれる。

...hereby [by Virginia plantation] we shall honour our selves and strengthen our selves by propagating our owne religion: hereby we shall mightily advance the honourable name of the English nation, the honour whereof we ought every one to seek: hereby we shall mightily enrich our nation, strengthen our navie, fortifie our kingdome, and be lesse beholding to other nations for their commodities: and to conclude, hereby we shall rectifie and reforme disdorders which in this mightie and populous state are

scarce possibly to be reformed without evacuation: and consequentlie when we have achieved all these ends, we shall eternize our owne names to all ensuing posteritie, as beeing the first beginners of one of the bravest and most excellent exploits that was attempted since the Primitive times of the Church.[26]

上記の引用文にはCrashawのヴァージニア植民への熱意のすべてが集約されていると言っても過言ではない。Crashawは，ヴァージニア植民が異教徒の改宗を目的とした宗教的使命を担った国家的プロジェクトと見なす一方，他方で一イギリス人として愛国的ナショナリストとしての一面をも見せている。異境の地にキリスト教を広めることによってイギリス人の名を高め，イギリスを強化し，イギリスが更に自立した国家とるというCrashawの力強い言葉はいやがうえにもイギリス人をヴァージニア植民へと駆り立てずにはおられない。最後の文章における植民者の名は後世にとってキリスト教会の有史以来最も勇敢な最もすばらしい偉業の一つを最初に始めた人として永遠にその名を留めるとCrashawは言うが，これほど雄弁に情熱的にヴァージニア植民を励行した言葉は1609年から始まり1622年に終わる同様のヴァージニア植民擁護の説教に見つけるとはむづかしい。Crashawはピューリタン的な人物であるが，この時期のなかで彼の説教以上に高尚な説教はない[27]と言われる所以は十分に理解できる説教である。

【2】ヴァージニア植民の合法性

Crashawは植民を妨げる“discouragement”として7つを挙げているが，その一つが植民の合法性である。Symondsの説教でもこの問題をSymondsは論じ，ヴァージニア植民の違法性を否定していたが，Crashawにとっても植民の合法性は避けて通れる問題ではなかった。入植希望者にとって植民の合法性が保証されなければわざわざ法を犯してまでもヴァージニアへ行く必要はない。そもそもヴァージニア植民が違法であれば植民それ自体が人々の関心を失わせ，ヴァージニア会社そのものも消滅してしまう。それゆえ植民の合法性はなんと

しても確約しなければならなくなってくる。この問題をCrashawは最初の“discouragement”として取り上げる。

ヴァージニア植民の合法への疑いは良心的なキリスト教的な観点からしても当然生じてくる疑いである。これがために入植を躊躇する者が出ている。最初にCrashawはある行動が合法的にみえなければそれは良くはあり得ないし，必要でもない，という一般論から始める。この論法はヴァージニア植民が「良く」「必要である」と言う前提に立っている論法である。Crashawがヴァージニア植民を良しとし，必要とする背景には，異教徒の改宗があった。Crashawにとって異教徒の改宗はキリスト教王国の建設をもたらすものであるゆえ，ヴァージニア植民は必然的に「良し」となり「必要」となってくる。ヴァージニア植民の合法性を裏付ける二点目はイギリス人は異教徒からは彼らの意志に反して何も奪わないことである。イギリス人と異教徒との取引は「公平で」「合法的」な取引である。キリスト教徒は異教徒に悪は行わないのである。第三に他国民との物々交換は合法的である。これらをヴァージニア植民にあてはめると，イギリス人は未開人から暴力，略奪，悪知恵によって彼らの所有物，土地，自由，生命を奪ったりはしない。彼らに悪事を働くことはせず，むしろ悪をさせないようにしている。次にインディアンとの物々交換である。イギリス人がインディアンから土地を奪うと言ってもそれは彼らにとっては余分な土地であって，インディアンが余分持っているものとイギリス人が余分に持っているものとを交換してもそれはなんら法に触れない。しかもイギリス人が求める土地は未開地で人は誰も住まず，野生動物しか住んでいない。イギリスの現状では人口増加等でほかの土地が必要であり，インディアンも住まない土地にイギリス人が住んでも問題はない。インディアンから様々な産物を購入する代わりにイギリス人は何を彼らに与えるのか。インディアンが最も必要としているのは“Civilitie for their bodies”と“Christianitie for their soules”である[28]。文明とキリスト教こそイギリス人がインディアンに与えることのできるものである。特に文明の利器をインディアンに与えることにより彼らはより幸福な生活を送れるようになる。イギリス人がインディアンに与えることができる最も重要なものはキリスト教で，神や彼らの魂のために彼らは自由にキリスト教を受け取る

ことができる。Crashawの植民の合法性の論拠は(1)原住民の意志尊重(2)互いの余剰物交換(3)未使用の土地利用(4)原住民の文明化貢献，である。これらの点からCrashawは植民に非合法的なところはなにもないと断言するのである。Crashawの言うごとく，イギリス人のヴァージニア植民が進行すれば何も問題はない。しかし実際はヴァージニアでのイギリス人とインディアンとの衝突は避けられず，「血なまぐさい」入植の相を呈していた。Crashawの植民合法の論法はイギリス人からの現実を直視しない理想論であると言わざるをえず，その背後にはやはり白人至上主義，キリスト教絶対主義の精神があり，一イギリス人の一方的な植民合法宣言であると言えよう。

【3】ヴァージニア植民への聖書適応

Crashawの植民合法性の主張はSymondsと異なり聖書には依存しない。Symondsは「創世記」での主のAbrahamへの命令，「地を満たせ」から原住民の住むヴァージニアの植民化を容認した。しかし，Crashawは聖書に依拠してヴァージニア植民の合法性を訴えはしない。Crashawがヴァージニア植民への聖書適応を全く行っていないかというとそうではなく，Crashawも聖書の適応は行っている。まず最初に検討しなくてはならないのはCrashawが説教の巻頭に挙げた「ルカ伝」である。「ルカ伝」とヴァージニア植民はいかなる関係にあるのかが問題である。「ルカ伝」22章32節は「しかし，わたし（イエス）はあなた（ペテロ）のために，信仰が無くならないように祈った。だから，あなたは立ち直ったら，兄弟たちを力づけてやりなさい」である。この一節はいわゆるイエスがペテロのために神へとりなしの祈りをしている箇所である。弟子たちはイエスと共に様々な試練に会うが，その試練に屈しないようにとイエスは神に祈るのである。「ルカ伝」の一節後イエスのオリブ山での祈り，イエス逮捕，ペテロのイエス否認，裁判，十字架上でのイエスの死と「ルカ伝」は続くが，ペテロに対して強い信仰を持つようにイエスは神に祈るのである。Crashawは「ルカ伝」の一節を二つに分け，前半は「キリストの慈悲」を，後半は「ペテロの義務」を表していると解釈する。つまり前半はキリストの僕の魂への愛の宣

言であり，後半はキリストの愛を味わった人の義務，即ち人が「立ち直った」ときには，次に人は他人の「立ち直り」に励まなければならないことを扱っている。改心した者は他人を改心する義務がある。Crashaw の解釈はキリストの前面的な受け入れである。「ルカ伝」の一節の前半ではキリストの慈悲を論じているが，我々はキリストから(1)下剤（purgative）(2)強壮剤（restorative）(3)予防剤（preservative）の三つの「薬」を受ける[29]。最後の「予防剤」により，我々は恩寵と神の寵愛に与ることができる。キリストの力強い神へのとりなしにより「心地よい予防剤」[30] をもたらしてくれる。ここでいう「予防剤」とは神から離れ，サタンの手に陥るのを防いでくれるという意味であるが，キリストの神へのとりなしによって人はいかなる困難をも乗り越えて行くことができるのである。もちろんペテロはイエスを否認するという心の弱さをさらけ出したが，その後はイエスの福音を異教徒に広めるために地中海を奔走した。「ルカ伝」の一節は以下のように解釈される。キリストは，ペテロが “great professor” で “protester” であることは認めるが，敵サタンがいかに強力で，いかにペテロが弱い人間であるかペテロ自身は知らない。ペテロはキリストのために死ぬと言うが，サタンがペテロをふるいにかけ，サタンの力を最大限試すまでペテロへの誘惑を止めはしない。神へのとりなしによってキリストはペテロを支え，再び生き返らせる恩寵をペテロに獲得してあげた。イエスはペテロを神の選民にとって心地よい見本とする。ペテロを贖ったキリストはペテロへの愛を止めない。Crashaw の「ルカ伝」解釈は以下のように集約される。

Thou [Peter] therefore in remembrance of what I have done for thee, when thou feelest the sweetnesse of this my mercy to thy selfe, teach others by thy examples, and endeavour seriously the conversion and confirmation of thy brethren.[31]

キリストの甘美な慈悲を感じたらイエスの行為を思い出しキリストの慈悲を他人に教え，同胞の回心と強化に努めよとのキリストからのペテロへの忠告である。つまりイエスがペテロに対して行ったことをペテロは他人に対して行わねばならない。神へのとりなしによりペテロは以前のペテロとは異なる人間とな

り，恩寵のない状態から恩寵に満ちた状態へと変化した。キリストとペテロの関係をヴァージニア植民に適応したらどうなるのか。Crashaw は Symonds と異なり，「ルカ伝」22章32節を直接ヴァージニア植民に適応はしない。あえて適応をすれば，キリストにすべてを投げ打ってまでキリストを救おうとしたペテロはヴァージニアへキリストの教えを広めに行くイギリス人となる。過酷な現実に耐えることができない弱い心の持ち主であるペテロがキリストの神への取りなしによって生まれ変わるように，ヴァージニアへ向かうイギリスも神への全幅的な信頼により生まれ変わることができる。キリストの慈悲を受けるにはただひすらたゆまぬ神への信仰心をもてばよい。Crashaw によればヴァージニア植民者はまず最初に自らが生まれ変わる必要があり，生まれ変わったら今度は原住民を生まれかわらせなければならない。真のキリスト教徒の任務はかくしていまだキリスト教に無知な人々にいかにして福音を教えるかである。世俗的な利益に惑わされ，ヴァージニアへ向かう者は真の植民者ではない。ヴァージニアへ行く者はまず敬虔なキリスト教徒となり，確固たる信仰心を持ってヴァージニア植民に赴く必要がある。キリストがペテロのために祈ったようにヴァージニア植民者にもキリストは祈ってくれる。植民者が真のキリスト教徒となればキリストは絶えず彼らの側にいる。

...then doubtlesse it cannot but minister strong consolation to a distressed soule and terrified conscience to remember that they have a Saviour more mighty in his mercy, then the divill can be in his malice, and more willing to save then the divill can be to destroy.(32)

キリスト教徒とサタンとの対立はピューリタンの大きな特徴であるが，真のキリスト教徒はいつも救世主イエスの慈悲を受けている。「ルカ伝」22章32節でキリストはペテロの信仰がなくならないように祈った，と言ったがそれは神の慈悲の偉大さと罪深い魂へのキリストの愛を表している(33)。慈悲深いキリストが絶えず側にいることを思い出すことは悩める魂とおびえた良心に強い慰めを与えずにはいられないと Crashaw は述べるが，これはヴァージニア植民者にとっ

て揺るぎのない自信と勇気を与えることになる。なぜならヴァージニア植民者は神の言葉を伝えにヴァージニアへ行くのであり，心の改宗を終えており，しかもキリストが絶えず味方として背後にいるからである。キリストを味方にすればヴァージニア植民が失敗することはありえない。

And to make application: It may yeeled us much satisfaction who are ingaged in this present action［Virginia plantation］, to consider that though satan seeke to make us dessist, and because he cannot, therefore will hurt us, by all his power....yet we have Christ Jesus on our side, whose kingdome we are to inlarge: whose love to his children is such, that even then when satan sifts them most narrowly, he with his praises is most neere them for their assistance: And therefore we doubt not, but that seeing satan is now so busie to sift us by all discouragements, and by slanders, false reports, backwardnesse of some, basenesse of others, by raising objections and devising doubts, endeavours to da[u]nt us, and so to betray the businesse that God himselfe hath put into our hands:(34)

サタンがいかに植民者を邪魔しようとしても絶えずキリストが近くにいて彼らに援助の手を差し伸べている。上記の引用文での“application”に注意したい。Crashawは「ルカ伝」をヴァージニア植民に適応しているのである。「ルカ伝」においてペテロへの試練に屈しないようとのキリストの祈りがあったように，ヴァージニア植民においてもサタンがいかに植民を妨害しようともキリストは植民者のために祈ってくれる。キリストのペテロへの祈りから知るもう一つは，真に改宗し恩寵へとよばれるキリスト教徒は完全に最終的に堕落することはありえないということである。さらにキリスト教徒が恩寵に与る真の原因は我々の力とか信仰の完全さではなく，あくまでもキリストの慈悲にある。「ルカ伝」から知る最後の点は，我々を堕落から支えてくれるのはキリスト慈悲と真実であることである。Crashaw は「ルカ伝」22章32節から学ぶべきこととして以上の４点をあげるが，彼はいずれもキリストの慈悲を強調していることがわかる。我々が生きているのはキリストの慈悲のお陰である。キリストのペテ

ロへの祈りはペテロにだけ通用するのではなくペテロのように信仰の弱い人間，ややもすればサタンの手に落ちそうな人間すべてに言えることなのである。ペテロはキリストの祈りによって信仰心を持続できたが，キリストとペテロの関係は彼らだけの関係ではなく，ヴァージニア植民者との関係にまで及ぶ。

「ルカ伝」22章32節の後半の「あなたが立ち直ったときには，兄弟たちを力づけてやりなさい」についてのCrashawの解釈のポイントは「改宗」である。利益を求めてヴァージニアへ行く者はまだ「立ち直らない」人で，世俗的で，聖別されていない人である。

立ち直った人，即ち改宗した人は次に他人に善を施すことができる。Crashawはヴァージニアへ行く人は普通の人ではなく特別に神から聖別された人であるという。植民者は神から選別されて初めてヴァージニアへ行くことができる。聖別されない人には他人を改宗する資格はない。Crashawが改宗した人と言うとき，それはどのような人を言うのか。Crashawは改宗した人について以下のように言う。

...when a man is converted, he is in a new mould, flesh and bloud no longer beare rule in him, and hee bids battell and stands in opposition and defiance with all such carnall resolutions as this is.(35)

改宗するとは新しい人間に生まれ変わることを意味し，「血と肉」にはもはや支配されず，物欲的な人と絶えず戦うのである。ピューリタンには特に劇的な改宗を体験した人が多いが，ピューリタン的考えをもつCrashawもさかんに「改宗」を強調する。キリストと改宗した人との関係にについてCrashawはさらに次のように言う。

A chrisitian converted hath hold of God by his faith and love: God hath hold of him by his eternall election and covenant of grace and by the love he bears him in Christ:(36)

改宗したキリスト教徒は信仰と愛により神をつかんで離さない。神は神で永遠の選びと恩寵の約束とキリストへの愛によって改宗したキリスト教徒を離すことはない。改宗したキリスト教徒と神との切っても切れない親密な関係が両者にはある。だからたとえ我々が神から離れようとも神は手放してはくれない。

...though we let goe the hold we have of God, God will never let goe the hold he hath of us; but in that love he beares us, he still upholds us; and so we stand not by our own strength but by the grace and mercie of God, who like the stronger man holds us, as we shall not depart from him.(37)

一旦改宗した人は二度と神の手から離れることはできない。真にキリスト教徒になることは神と親密な特別な関係を結ぶことである。そのような特別な関係の中でキリスト教徒は他の人を改宗へと向けさせ，その人が又他の人を改宗させ，次々と輪が広がっていく。Crashaw が改宗を強調するのは裏を返せばキリスト信者の拡大によって強固なキリスト教王国を建設したいからである。

「ルカ伝」22章32節を Crashaw が説教のテーマに取り上げた理由は何だったろうか。また,「ルカ伝」のヴァージニア植民への適応はどうなるのか。このような問題を考えるとき以上にも見たようにキリストのペテロへのとりなしはヴァージニア植民者へのとりなしとなってくる。ペテロはキリストから祈ってもらうまでは強い人ではなかった。サタンに感嘆に誘惑されそうな人であった。しかしキリストの祈りによってペテロは立ち直ったである。ヴァージニア植民者に期待することはペテロ同様「立ち直る」ことである。立ち直って初めて彼らはヴァージニア植民者としての力を得ることになる。Crashaw は「ルカ伝」に基づき，それをヴァージニア植民へ直接適応することはない。ただ「ルカ伝」の一節の解釈から人が立ち直って，神との親密な関係を結ぶことの重要性を説いているのである。しかし「ルカ伝」解釈が全くヴァージニア植民と無関係であるかといえばそうではなく，その解釈は間接的に植民者の植民に対する心構えと関わってくるのである。ヴァージニア植民者は単なる経済的な動機からヴァージニアへ行くのではない。彼らにはそれ以外の明確な植民の使命が

あり，それは言うまでもなく異教徒改宗である。そのために植民者に求められるのは植民者自らの改宗である。植民者の改宗なくして原住民の改宗はありえない。「ルカ伝」から考えられる適応は以上のような適応である。とすればペテロはヴァージニア植民者となる。ペテロがキリストからの神へのとりなしの祈りによって立ち直ったようにヴァージニア植民者も神からの祈りによって立ち直る。そしてペテロが立ち直った結果として，以後キリスト教普及のために奔走したようにヴァージニア植民者もヴァージニアで異教徒インディアンの改宗に従事することになる。「ルカ伝」22章32節をヴァージニア植民への適応はおおよそこのようなものとなる。しかしCrashawの適応はSymondsほど明白な適応とはなっていない。Crashawにとって最大の関心事は植民者の改宗であった。そして改宗した植民者による原住民改宗であった。CrashawはSymondsのように図式的に聖書をヴァージニア植民へ適応することはしない。この後で論ずるDonneの説教もSymonds同様聖書をヴァージニア植民へはっきりと適応するが，Crashawは「ルカ伝」のヴァージニア植民への適応は行わない。これはなぜだろうか。考えられる一つの理由はCrashawが余りにもキリスト教に対して情熱を抱き，そのために客観的にヴァージニア植民を見ることができなかったのではないかということである。ピューリタン的道徳感の強い宗教人だったCrashawはヴァージニア植民を突き放して見るとはできなかった。もしCrashawにSymondsやDonneのような冷静な観察力が備わっていたならばCrashawも「ルカ伝」以外にヴァージニア植民により符号する聖書の一節をとりあげて，十分な適応によりヴァージニア植民を擁護できたはずである。Crashawの性格からしてCrashawは図式めいた適応にはそれほどの興味を示さなかったかもしれない。それよりも聖書についての博学を示せばそれで十分だったのである。聖書ヴァージニア植民への適応がどのように行われるかに興味津々だった聴衆にはCrashawの説教はいささか肩すかしをくらうような説教となっていると言ってもよい。聴衆はいかにしてCrashawが「ルカ伝」をヴァージニア植民に適応するかを期待していたであろうが，Crashawはそれを行わない。前年1609年のSymondsの説教に言及するくらいだから，ヴァージニア植民説教がどのようなことを説教すればいいのかCrashawは十分理解していたはず

である。なのにCrashawはヴァージニア説教の定石を完全に守ることはしなかった。Crashawの説教は余りにも聖書に深入りしすぎたがためにヴァージニア植民への適応がおろそかになってしまった説教であった。

「ルカ伝」のヴァージニア植民への適応は成功したとは言えないが，Crashawは他のところでは聖書を引き合いに出し，ヴァージニア植民を擁護するのである。例えば，ヴァージニア植民を躊躇させていたことの一つに植民事業が合法的か否かの問題があった。これに対してCrashawは，キリスト教徒は異教徒には何も不正は働かないと言って，「創世記」23章のアブラハムの妻サラの死に際しての異境の地における埋葬を取り上げ，アブラハムの紳士然とした行動を引き合いに出す[38]。あるいはヴァージニア植民は原住民のインディアンから言わせれば彼らの土地への侵入であるが，ヴァージニア入植は彼らの土地を奪うためではなく，彼らに霊的なものを与えるためであると言って，「コリント人への第一の（信徒への）手紙」9章11節を援用する[39]。また，ヴァージニアへの航海に際しての海の波や雨については「エレミア」や「詩編」を引用し，海も風もサタンの手にあるのではなく，すべて主の意のままであるから，何ら恐れることはないと言う[40]。ヴァージニア植民者が最も懸念した植民者の数の少なさについては，多くの偉業はすべて少ない数から始まったと言い，エジプトにおけるイスラエル人の数の少なさを「申命記」や「出エジプト記」から引用する[41]。あるいはダビデの王国は400人から始まったと言って，「サミュエル記」を引用してすらいる[42]。Crashawは，ヴァージニア植民を聖書から援護した後で次のように「旧約」イスラエル人をヴァージニア植民者に適応する。

Now how fitly this storie resembles the present businesse[Virginia plantation]we have in hand, I leave it to others to make application of the particulars. I onely say thus much:

The Israelites had a *commandement* from God to dwell in Cannan, we have *leave* to dwell in *Virginia*: they were *commanded to kill* the heathen, we are *forbidden to kill* them, but are commanded to *convert* them: they were *mighty* people, our are *ordinaries*: they *arned*, ours *naked*: they had *walled towns*, ours have scarce *hovels* to

cover them: that land flowed with *milke* and *honie*, our abounds with as *good or better*: they sent men to search *that*, so we do search *this*:...[43]

Crashaw は聖書の記述とヴァージニア植民との類似点，たとえば，イスラエル人の神からのカナン居住許可とヴァージニア植民のジェームズ一世からの許可，に言及するが，イスラエル人よりもヴァージニア植民者が，カナンよりもヴァージニアが優れているとすら言う。Crashaw は「旧約」のイスラエル人とヴァージニア植民者に対応関係を見出している。これはタイポロジー的に言えば,「旧約」のイスラエル人がジェームズ一世時代のヴァージニア植民者の予型となっている。このように Crashaw は最初「ルカ伝」をヴァージニア植民に適応したが，更にヴァージニア植民が直面した様々な問題を解決する方法として他の聖書をも利用していることが理解できる。しかし Crashaw のヴァージニア植民者励行の根幹を成すのは「旧約」のイスラエル人の歴史であって，その歴史を繰り返しているのがヴァージニア植民者であるという認識であった。イスラエル人はその歴史において多くの困難に直面し，王国消滅の危機にも遭遇した。しかし，イスラエル人が困難な状況にあればあるほど神は彼らに援助の手を差し伸べ，彼らを救ってくれた。イスラエル人はいわば神の選民としてついに王国の繁栄へと至った。このようなイスラエル人のが歩んだ歴史と同じ歴史をヴァージニア植民者は歩んでいる。神から特別な慈悲を受けたイギリス人は神の選民としてヴァージニアに赴くのである。彼らの行く手には多くの困難が待ち受けているが, 何も恐れることはない。なぜなら神が耐えず彼らを助けてくれるからである。Crashaw の説教はこのように聖書のイスラエル人をヴァージニア植民者に適応することにより，植民者の不安や躊躇心を取り払おうとする。ヴァージニア植民者は Crashaw からすればキリストの使徒（Apostle）である[44]。キリストの使徒たちに課せられた最大の任務は異教徒へのキリスト福音布教であったが，ヴァージニア植民者に課せられた使命も同様キリスト教の異教徒への布教である。Crashaw は説教でまさしくヴァージニア植民者の宗教的使命を高らかに宣言したのである。

3．John Donne

1622年11月13日，John Donne はロンドン・ヴァージニア会社の要請を受け，説教を行った。ヴァージニア会社は本来アメリカ・ヴァージニアの植民を目的として作られた会社であるが，当時の著明な説教家に会社を擁護する説教をしてもらっている。1622年11月13日，Donne は会社の要請を受け入れ，それまでの慣行に従い会社を擁護する説教を行った。1622年と言えば，ヴァージニア会社が植民活動を始めてから16年経ており，会社解散の２年前である。ヴァージニア植民はこの間様々な困難に直面し，Donne が説教を行った1622年３月にはインディアンによる入植者殺戮事件があり，ロンドンのヴァージニア会社関係者及び一般人に衝撃を与え，ヴァージニア植民への熱意が急速に冷えつつあった時期であった。ヴァージニア会社側は改めて会社の命運と植民への決意を Donne の権威にすがりながら表明することになる。Donne の数多くの説教の中でも特に良く知られているこの説教はいわゆる“promotional literature”の一環をなすものであるが，我々はこの説教から Donne の説教方法，当時会社が抱え込んでいた諸問題，及び一ナショナリストとしての Donne の一面を知ることになる。Donne は聖書を援用しながら使徒的使命を植民者に課す一方で，会社の商業的活動をもまた論じ，英国の植民地政策を擁護する。Donne の説教のレトリックである聖書の「適応」を中心にしてヴァージニア説教を論じていきたい。

Donneが説教するにあたり取り上げた説教の一節はイエスが弟子達への約束と命令を記した「使徒行伝」1章8節である。

But yee shall receive power, after that the Holy Ghost is come upon you, and yee shall be witnesses unto me both in Jerusalem, and in all Judea, and in Samaria, and unto the uttermost part of the earth.（あなたがたの上に聖霊が降ると，あなたがたは力を受ける。そして，エルサレムばかりでなく，ユダヤとサマリアの全土で，また，地の果てに至るまで，わたしの証人となる。）」(45)

Donne の説教の目的は，この一節をヴァージニア植民に適応し，ヴァージニア会社関係者及び一般の植民に関心を寄せている人達の不安や懸念を払拭するこ

とである。ヴァージニア会社という商業的性格の強い株式会社に投資家や植民者が何を期待していたかを察することはそれ程困難ではない。彼らが何よりも望み期待していたのは言うまでもなく「利益」であった。ヴァージニア会社がその植民地政策により「利益」を第一の目的としていたことは会社設立当初から明確であり，投資家たちも自らの投資の還元を期待していたのであり，植民者も「地上の楽園」ヴァージニアでの物質的成功を夢見ていた。ところがDonneが行った説教は「利益」という会社の第一の目的を二次的に考え，会社にとつては「利益」ではなく，「福音伝道」がその主なる目的であることを強調する。そのためにDonneがとった方法は使徒行伝の一節のヴァージニア会社への適応である。この適応によれば植民者は「(使徒達と) 同じ舞台の役者[46]」となり，使徒達にとってこの世の果てが福音伝道の場であったと同様，植民者にとってもこの世の果て，ヴァージニアが彼らの舞台となる。そして「使徒達の行い」を演じ，「暗やみの中に座っている異邦人に光となり，海を越えてキリストの名を運ぶ[47]」ことが彼らの第一の任務となる。Donneが説教を行った年の3月にヴァージニアでインディアンによる植民者大虐殺事件[48]があり，英国内では反インディアン感情が高まりつつあったが，Donneは無暗に反インディアン感情を煽ることはしない。逆に，Donneは「使徒」としての使命をヴァージニア植民者に課し，彼らに「使徒達の行いを演ぜよ」と述べ，植民者の行動の規範を使徒達に求めるのである。

このようにDonneは使徒行伝1章8節を巧みにヴァージニア植民者会社に適応し，植民者の使徒的使命を明確にするが，更に，その前の7節をも同様に適応し，会社の宗教的使命を強調する。1章7節でイエスの昇天の際に弟子達が「主よ，イスラエルのために国を復興なさるのはこの時なのですか」と聞くが，それに答えてイエスは「時期や場所は父が御自分の権威によつて定めておられるのであって，あなたがたの知る限りではない」と述べる。その後に冒頭の一節が続く。ここではイスラエルの復興という世俗的な王国の建設をイエスに要求する弟子はヴァージニアでの経済的な繁栄，物質的な利益を期徒する植民者となってくることは言うまでもない。現世的な王国をせがむ弟子達とそれに答えるイエスとの関係をDonneは次のように述べる。

...something the Apostles had required, which might not bee had: not that; And it is an inclusive word; something Christ was pleasd to affoord to the Apostles, which they thought not of; not that, not that which you beat upon, But, but yet, something else, something better then that, you shall have.(49)

"something the Apostles had required" とはイスラエル王国の復興をさすが，イエスはそれを使徒達に約束しなかった。ヴァージニア植民者にとっては，使徒たちと同様に「福音伝道」こそ第一に考えるべきことであって，物質的な繁栄は考えるべきことではない。イエスの弟子達にとってこの世の王国ではなく，神の国建設がその最終目標であったと同様，ヴァージニア会社植民者も現世的王国，物質的繁栄をヴァージニアで求めるべきではない。異境における神の国の建設及び異教徒のキリスト教への改宗こそをその第一の任務としなければならない。Donne は次のように言う。

let not the riches and commodities of this World, be in your contemplation in your adventures, Or, because they aske more, Wilt thou now restore that? not yet; If I will give you riches, and commodities of this world, yet if I doe it not at first, if I doe it not yet, be not you discouraged; you shall not have that that is not Gods first intention; and though that be in Gods intention, to give it you hereafter, you shall not have it yet;(50)

ここで Donne は「現世の富とか利益を投機に際しては考えるな」と言う。なぜかといえば現世の富とか，利益は神の最初の意図にはないからである。Donne からすれば植民者は使徒的な使命と任務とをたづさえてヴァージニアへ行くのである。Donne は会社の宗教的性格を意図的に浮かび上がらせ，投資家や植民者が切望していた物質的利益には触れないようにしている。そして，利益や世俗的王国に未だ関心を抱いている人には早く心を入れ替えるように勧める。更には，「即座の利益」，「急に裕福になる方法」，「ヴァージニアからの多量のすべての望ましい産物」を自己本位に考える人は言わば自己充足者であり，誰をも

必要としない人である。そのような人は現世的な王にも等しい人であり，正しい道にはない。ではどのような人がよいか言えば，ラッパ，ナイフ，手斧と同じ程ヴァージニア原住民の間で素晴らしい製品となる教理問答を現地に持っていくことの出来る人，又，ヴァージニアからの船が英国に帰る際に何人のインディアンがキリスト教徒に改宗したかを船がどんな木材，薬種，染料を持ち帰ったかと同じ程考えている人なのである(51)。つまり物質的な利益だけでなく異教徒の改宗をも同時に考えている人は正しい人なのである。そして自由な生活や富は聖書で除外されている地上の王国の特徴であり，キリストの弟子達はそのような王国を求めるべきではなかった。だからヴァージニア植民者も自由や豊かさに代表される「地上の王国」をヴァージニアに求めるべきではないと結論づける(52)。

このようにDonneは聖書をヴァージニア植民に適応しながら投機目的の聴衆に対して植民の使徒的使命を明確にし，「使徒」としての使命をヴァージニアに果たすことを聴衆に訴える。株資家や植民者の目的は使徒同様福音の伝道と異教徒の改宗であるべきで，利益がその目的となってはいけない。なぜならそれは聖書に先例が見られないからである。しかしながら，ヴァージニア会に対して「利益」を捨て，「福音」にのみ専念せよと説くことは商業的性格の強い会社の実状を考えると余りにも理想的すぎる。しかし，人々の最大の関心事である「利益」抜きの説教では会社がDonneに説教の依頼をした意味がない。一見したところDonneの説教は非常に宗教的色彩の濃い伝道説教に見えるが，よく見てみるとそこでDonneは極めて巧妙に「利益」の問題を扱い，しかもそれを聴衆に確約しているのがわかる。ヴァージニア会社から依頼された当時の著名な説教家が直面したのはいかにして会社の商業的性格を宗教的性格にまで高めるかであった。Donneはそれを聖書の適応によって巧みにヴァージニア植民の本来の目的を変えようとした。

使徒行伝の1章7節で弟子達がイスラエル王国の復興をイエスに願ったのに対し，イエスは神の国がいつ実現されるのかを神に問うことは出来ないと言う。それは神のみが知るところであって，我々の知るところではないからである。それに触れてDonneは次のように言う。

Whatsoever therefore Christ intended to his Apostles heere, hee would not give it presently, *non adhuc*, hee would not binde himselfe to a certaine time, Non est vestrum nosse tempora, It belongs not to us to know Gods times.[53]

ここで *non adhuc* という言葉が Donne の論理展開上極めて重要な語句となることに注目したい。なぜなら神はすぐにはイスラエル王国の復興を約束はしないが，それは「まだなのである」からである。これは裏を返せばいずれは神はイスラエル王国の復興を実現してくれることを意味する。ただ神の約束が実現されるまでは時間がかかるだけなのである。神の約束がいかに時間を要するかを示すために Donne は聖書から様々な例を引いてくる[54]。そして，たとえ失敗，困難，障害等様々な悪条件が重なって会社が危機に接しても神は幾度も援助の手を差し伸べてくれる。丁度，ノアの大洪水後にも依然として，神は人類に暖かい目を注いでくれたように，即座にヴァージニア植民から何も利益がないとか同僚が帰国しないとかインディアンによる大虐殺があったからと言っても決して失望することはない，動物は大きければ大きいほど長く母の胎内にいるものだ，と性急な結果を望む人たちに辛抱強い忍耐をダンは説く。神がゆっくりと時間をかけてイスラエル王国を地上に築き上げたようにヴァージニア会社も（いつかはわからないが）いずれは報われる時がくる。今はただキリストの教えを広めることに専念せよ，そうすれば結果はいずれ自ずと明らかになる。Donne はこのように聴衆に熱弁をふるう。

しかしながらヴァージニア会社の株主となった聴衆の関心が「現在」の即座の利益の還元にあることには変わりない。確かにヴァージニア植民を取り巻く現状は厳しい状況にあるが，ヴァジーニア植民は現に多くのことに役立っており，植民計画を断念する必要はない。死刑囚，軽犯罪者にとってヴァージニアは再生の場を提供しており，又，植民計画により水夫が職を得，雇用の機会が増加し，国内の失業問題解消に貢献している。更には販売可能な産物が英国に送られてき，今や英国はカトリック教側の羨望の的となっているほどである。国内外の様々な社会的，経済的，宗教的諸問題をヴァージニア植民は解決してくれ，しかも宗教上の大敵カトリック教側をも一歩リードした形で植民は進ん

でいる。Donneは説教家というより一人の愛国者の立場に立ち，ヴァージニア植民を全面的に支持する。これは又，Donneのジェームズ一世への忠誠，支持の表明でもある。このようにDonneは決して「利益」を否定はしない。それはやがては手に入るのだから何も心配する必要はない。それでは今すぐに手に入るものはないのであろうか。聴衆が一番聞きたいのはまさにそれであろう。Donneによれば使徒達はこの世の王国を手にいれることは出来なかったが，確実に手に入れたものがあった。

All that you would have by this Plantation, you shall not have; GOD bindes not himselfe to measures; All that you shall have, you have not yet; GOD bindes not himselfe to times, but something you shall have; nay, you have already, some great things; and of those that in the Text is, The Holy Ghost shall come upon you.(55)

確実に手に入るものとは何かというと聖霊がやってきて，良心が改められ，「力」を得ることである。この「力」は必ずや手に入る。なぜかと言えばイエスは弟子達に向かって，聖霊が下るとき彼らは「力」を受けると「使徒行伝」で言っているからである。ではどうすれば聖霊はやってくるのか。「福音」を広めたいという衝動を自らのなかに見い出しさえすればよいのである。

whether the example and precedent of other good men, or a probable imagination of future profit or a willingnes to concurre to the vexation of the Enemie, what collaterall respect soever drew thee in, if now thou art in, thou art in, thy principal1 respect be the glory of God, that occasion, whatsoever it was, was *vehiculum Spiritus Sancti*, that was the Petard, that broke open thy Iron gate, that was the Chariot, by which he entred into thee,...(56)

神の栄光を主なる関心事とすれば聖霊は人を選ばず，誰にでもやってくる。聖霊などという霊的な存在に対して果たしてそれが各人にやってくるのかは利益目的の聴衆にはなはだ疑わしいところであるが，Donneは聖書を援用し，まず

神の栄光を考えれば聖霊はやってくると断言し，聴衆を安心させる。そして「聖霊」と「利益」との関係について次のように述べる。

...and now hee is fallen upon thee, if thou do not Depose (lay aside all consideration of profit for ever, never to looke for returne) No not Sepose, (leave oput the consideration of profit for a time) (for that and Religion may well consist together) but thou doe but Post-pose the consideration of temporall gaine, and study first the advancemaent of the Gospell of Christ Iesus, the Holy Ghost is fallen upon you, for by that, you receive power, sayes the Text.[57]

Donne は決して「利益」を禁じているのかと言うとそうではない。ヴァージニア会社の目的は「利益」ではなく「福音伝道」だと Donne は言うが，Donne は巧妙に「利益」と「宗教」を両立させて認めているのである。Donne のこのようなロジックは上の商業活動と宗教活動が矛盾することなく両立しうると言明するときにも見られる。そこではっきりと「利益」をあきらめることなくただ「福音伝道」を先に考えれば自ずとあとから聖霊はやってくると言っている。とにかく誰にでも可能なことであるが，「福音伝道」を最初に考えさえすればよいのであり，そうすることによって聖霊という神の援助が訪れ，「力」が手に入るのである。現世王国，利益は直ちには手に入らないが，福音を広めることによって「力」だけは確実に手に入る。この「力」こそが現世王国，物質的繁栄よりもはるかに価値のあるものとなってくる。そして聖霊によってヴァージニア会社の第一の目的は利益や世俗的な栄光ではなく，神の栄光へと魂を向けさせることだと良心は言うことが出来るのである。このように聖霊によって良心が改められ，「力」を得るが，一体それは何をする「力」なのか。それはキリストの証人となる「力」なのである[58]。Donne が「使徒行伝」を引用しつつ聴衆に最も強く訴えたかったのは実はこの「キリストの証人」となることに他ならない。なぜなら使徒の使命は「福音伝道」であり，キリストの証人となることであるからである。ヴァージニアへ行く者にとって聖霊にまさる援護はない。この聖霊によりいかに生命の危険，困難，障害があろうとも植民者は神の僕と

なり，神の教えを広めこるとに専念出来るのである。Donne によれば「不名誉(Infamy)」は，法が人間に与える最高の罪であり，それは死後も残る。そして証人能力喪失は不名誉の最も深い傷の一つであり，最悪の証人能力爽失はいかなる人の証人であると信じられもせず，認められることも出来ないことである。又，口先だけのキリスト教徒も証人能力喪失者であり[59]，この論理に従えば聴衆は否応無しにキリストの証人とならざるをえず，「福音伝道」を実践しなくてはならなくなってくる。Donne にとつては現世における究極目的はキリストの「証人」となることであり，キリストの証人となって初めて物質的な繁栄も生じてくる。

我々はこれまで Donne の説教を通して Donne がいかにして聴衆の最大の関心事である「利益」の問題を扱っているかを見，更に，Donne は「福音伝道」を強調する一方で，又，「利益」という問題を巧みに処理していることも見た。Donne が説教を行った1622年はインディアン襲撃事件，会社の財政危機，会社内部での対立抗争等様々な悪条件が重なり，会社そのものが重大な危機に接していた年であり，会社は人々の関心をいかにヴァージニア植民へ向けるかの難局に直面していた。とりわけ，ヴァージニア会社への出資者を獲得するか否かは会社にとつて文字通り死活問題であり，会社は宝くじで運営資金を集め，植民者を募っていた。ヴァージニアでの経済的繁栄，成功は人々にとつて植民に加わるべきか否かの重大な問題であつたが，Donne のこの問題の扱いから我々は Donne が「利益」や物質的繁栄を完全に否定しているのではないことを知つた。むしろ巧みな論理で Donne はそれを聴衆に保証しているのである。とにかくキリストの証人になり，「福音伝道」に専念すれば「利益」は自ずから生じてくるのである。Donne は，ヴァージニア会社が直面した様々な問題，困難を聖書の一節を植民事業に適応し，聖書によってそれらの問題点を解決しようとしたのである。聖書に記述されていることと同じ事を行うのがヴァージニア植民者なのである。

むすび

本論ではヴァージニア植民を擁護した William Symonds, William Crashaw, John Donne 3人の説教をみてきた。この他にも Robert Gray, George Benson, Daniel Price, Alexander Whitaker, Patrick Copland が同じくヴァージニア植民を擁護する説教を行っているが，紙面の都合上省かなければならなかった。いずれの説教もヴァージニア植民における宗教的使命をその第一の目的としてあげ，聖書を援護してヴァージニア植民を支持し，人々に植民活動に加わるよう説得している。本論で論じた説教家のなかでは Symonds と Donne の説教が聖書を植民に適応していたが，Crashaw の説教は直接聖書を植民に適応していない。いずれにせよ多分に経済的色彩の強いヴァージニア植民をいずれもが宗教的植民としていることは興味深い。ヴァージニア植民はその初めから困難極まる植民で，会社も一般の投機者にとってもヴァージニアは金銀採掘が期待できる夢の土地であった。しかし，植民は大きく期待を裏切り，バラ色というわけではなかった。ヴァージニア会社は多分に植民の現実を認識していた。ヴァージニア会社は，宣伝文書や現地からの真実を隠した報告書の発行により依然としてヴァージニア植民がイギリス人の夢をかなえてくれることを幾度も述べる。でもその宣伝には限界があった。それで会社が思いついたのが当時の名だたる説教家に植民擁護の説教をしてもらうことであった。当時の説教家の社会的地位は高く，信頼は厚かった。本論で挙げた説教家も当時説教家として名をはせた説教家で彼らの発言は社会に大きな影響を及ぼした。彼ら説教家はヴァージニア植民を世俗的な金儲けの対象としてよりは宗教的使命こそが植民のそもそもの目的であると高らかに説いた。ヴァージニア植民は利益のためではなく異教徒にキリスト教を教えるためにヴァージニアへ行くのである。これが1609年から1622年まで行われたヴァージニア植民擁護説教の共通テーマであった。ヴァージニア植民に対して興味を失い，ヴァージニア会社そのものが存亡危機にあったなかで何が人々をもう一度ヴァージニア植民へと駆り立てることができるのかといったらそれは人々の精神的支柱ともなるべく宗教であった。物質的な世俗的な植民動機では人々の心をいつまでもつなぎとめておくこ

とはできない。逆に宗教的使命を植民の目的と置きかえれば，それは人々の情熱をいつまでも消さずにすむかもしれない。Crashaw は，入植者は未開の地にキリストの名を広め，それによって彼らの名が永遠に後世に伝わると述べたが，この言葉以上に一般人の心をかきたてる言葉があるであろうか。各説教家はこのテーマを述べるためにさかんに聖書を利用した。その典型は聖書のヴァージニア植民への適応であった。16，17世紀の宗教の果たす役割について Hill は「当時の人々が宗教を社会秩序とその秩序を守る国家権力の維持のために必要であると考えたことには，疑いの余地はありえない」と述べているが(60)，これは聖書が依然として社会に対して強い権威を持っているかを示している。説教家は聖書をヴァージニア植民にあてはめ，ヴァージニア植民の原型を聖書に求め，植民者を説得しようとしたが，これは聖書の持つ影響力を考慮してのレトリックである。ヴァージニア植民者が行おうとしていることが聖書にも見られる，この指摘は一般の人々に与える影響は大きいと言わざるをえない。ロンドン・ヴァージニア会社は1624年にあえなく解散に追いやられるが，ヴァージニア植民者が幾多の困難をも克服し，現在のアメリカの基礎を築き上げた背景には経済的動機よりも宗教的な動機が果たした役割が大きかったと言えよう。

注

＊本論文は平成14年３月の科学研究費補助金（基盤研究（C）（２）研究成果報告書に基づいているが，今回大幅に加筆・修正を行った。特に William Symonds と William Crashaw については全面的な加筆・修正を行った。

(1) L. B. Wright: *Religion and Empire : The Alliance between Piety and Commerce in English Expansion 1558-1625*(New York: Octagon Books, 1965), p. 89. Wright は本論で扱う３人の説教家を取り上げているが，紹介で終わっている。Wright の書には「適応」の言葉は見られない。

(2) Wright, p.90.

(3) 聖書の日本語訳については『聖書』（東京：日本聖書教会，1992）を参照した。

なお聖書解釈については『旧約聖書略解』(東京：日本基督教団出版局，1975年)及び『贈訂新版　新約聖書略解』(日本基督教団出版局，1976年)に教えられるところが多い。

(4) William Symonds: *A Sermon Preached at White-Chapel* (London, 1609), p.3.

(5) Symonds, p. 9.

(6) John SmithとPocahontasについては，ピーター・ヒューム　岩尾龍太郎他訳『征服の修辞学　ヨーロッパとカリブ海先住民，1492-1797』(東京：法政大学出版局，1995)，第4章に詳しい。

(7) Symonds, p. 24.

(8) Symonds, p. 24.

(9) Symonds, p. 26.

(10) Symonds, p. 34.

(11) Symonds, p. 47.

(12) Symonds, pp.5-6.

(13) Symonds, p. 15.

(14) Symonds, pp. 12-3.

(15) Symonds, p. 15.

(16) Symonds, p. 15.

(17) William Crashaw: *A Sermon Preached in London* (London, 1610), C3.

(18) Crashaw, G3.

(19) Crashaw, K1.

(20) Crashaw, K2.

(21) Crashaw, K2.

(22) Crashaw, K4.

(23) Crashaw, K4.

(24) Crashaw, G2.

(25) 7つの“discouragement”とは(1)植民の合法性(2)航海距離と困難(3)貧弱な植民の始まり(4)ヴァージニアからの否定的な報告書(5)現地での厳しい生活(6)利益の不確実性(7)敵からの脅威，である。なお7つの“discouragement”についてはK. R. Andrews et al eds.: *The Westward Enterprise : English activities in Ireland, the Atlantic, and America 1480-1650* (Detroit : Wayne State University Press. 1979), pp. 265-7 や John Adir: *Founding Fathers : The Puritans in England and America* (London: J.M.

Dent & Sons Ltd. 1982), p. 112-3で触れられている。

(26) Crashaw, pp. K2-K3.

(27) *DNB* の Crashaw の項目参照

(28) Crashaw, D4.

(29) Crashaw, A2.

(30) Crashaw, A2.

(31) Crashaw, A2.

(32) Crashaw, A3.

(33) Crashaw, A3.

(34) Crashaw, A4.

(35) Crashaw, B1.

(36) Crashaw, B2.

(37) Crashaw, B2.

(38) Crashaw, D3.

(39) Crashaw, D4.

(40) Crashaw, E1.

(41) Crashaw, E2, E4.

(42) Crashaw, F1.

(43) Crashaw, F3.

(44) Crashaw, K4.

(45) ダンは，聖書の社会的適応の他にも，聖書を自らに適応することにも言及している。(G. R. Potter and E. M. Simpson, eds. *The Sermons of John Donne* [Berkeley: University of California Press, 1953-62], Vol.III. p.367参照。以下本論で使用するダンの説教はこの版による。)

(46) Vol. IV. p. 265.

(47) Vol. IV. p. 265.

(48) "Great Massacre" については，Alden T. Vaughan: *American Genesis* (Boston: Little, Brown and Company, 1975), Chap. IX や Bernard Sheehan: *Savagism & Civility: Indians and Englishmen in Colonial Virginia* (Cambridge: Cambridge University Press, 1980), Chap. 6 等参照。

(49) Vol. IV. p. 266.

(50) Vol. IV. p. 266.

(51) Vol. IV. p. 269.

(52) Vol. IV. p. 269.

(53) Vol. IV. p. 270.

(54) 例えば，救世主の神の約束は実現するのに4千年要したとか，神が約束の地を示すのに2千年かかったとかである。

(55) Vol. IV. p. 273.

(56) Vol. IV. p. 273.

(57) Vol. IV. pp. 273-4.

(58) Vol. IV. p. 275.

(59) Vol. IV. pp. 275.

(60) クリストファー・ヒル　小野功生訳『十七世紀イギリス人の宗教と政治』(東京：法政大学出版局，1995)，p. 18.